

新企画

スポーツ界で、県内のみならず全国や世界で活躍した「新屋衆」たちを
本紙の新企画として、毎号連載で紹介して参ります。お楽しみに！

連載

新屋のアスリートたち①

昭和初期の名関脇 新海幸蔵

皆様は80年前、必殺の足技で国技館を沸かせた新屋出身の関取がいたことをご存知でしたか？一緒に時代を遡ってみましょう。

新屋出身力士の最高位を誇る新海（本名・中野幸蔵）は、明治37年2月29日、愛宕町の中野幸太郎・ワサ夫婦の長男として誕生した。子ども頃から体が大きく、目立った存在であった。



日新小学校時代
同級生たちより、かなり大きい

日新小学校高等科を卒業後、地元の高堂茶店に勤めたが、初めて母に連れられて茶店を訪れた時に、体格を見た主人が幸蔵本人ではなく、父と勘違いしたほどであった。

高等科の頃から相撲が強く、8月1日の栗田神社奉納相撲で度々優勝し、賞品の米を3俵も背負って帰宅したこともあった。

大正9年、入間川親方（四代目・両國樞之助）が秋田巡業に来た時に熱心に入門を勧め、父は「男ならやってみろ」と賛成。母は泣いて引き留めたが、入間川部屋に入門。大

正10年1月初土俵。四股名は故郷の新屋と日本海に因んで「あらうみ」と名乗っていたが、なぜかいつの間にか「しんかい」で定着した。

序の口、序二段、三段目を各一場所で通過。幕下5場所、14年5月には十両入り。昭和2年1月場所は8戦全勝で十両優勝を遂げている。この頃の得意技は「やぐら投げ」であり、足技に磨きをかけたのは、十両時代の2年間と言われている。

入幕は昭和2年5月。右四つ或いは二本差しから、相手が投げを打ってきたら足を掛ける。内掛けもあったが、外掛けは足の位置が高いにも拘わらず、ひたすら掛け続け、相手の腰が折れてしまうという強烈なもので、その体勢に持ち込むための立ち合いが巧く、サツと立って右から入るのは絶妙だった。

「タコ足の新海」と恐れられ、これで横綱・宮城山から金星3個獲得する活躍を見せた。

「オレの足クセは努力して身につけたもので年期が入っている。誰にも真似のできるもんじゃない。外掛けにしても足元に掛けるのが普通だ

が、膝のあたりに掛けてもピッタリと吸い付いてしまえば、簡単には外されないさ。子供の頃、日本海の荒海で鍛えたお蔭だろう。組めばしめたものだが、組めなくても相手が足クセを怖がって出てこないから、吊り身にも出られた。特に相手が投げを打つときに足を飛ばすとうまくなかった」——新海の談話である。



色白の秋田男らしい美男子で、特に花柳界の女性にはもてた。両国の旧国技館では「シンカイ」と甘い掛け声がよくかかったそうである。

昭和7年1月6日に勃発した春秋園事件（関脇・天竜が相撲協会の体質改善や力士の待遇向上を求め、幕内力士の過半数が同調し、中華料理店「春秋園」に立て籠もった事件）によって脱退し、関西角力協会主催のトーナメント戦で優勝した。



翌1月場所、帰参し、力士として最も脂の乗り切った時代を迎えた。9年5月場所では

東前頭筆頭で、初日には西の筆頭でメキメキ頭角を現してきた双葉山を鮮やかな内掛けで破った。7勝4敗と勝ち越して関脇に昇進し、翌年1

月場所も6勝5敗で勝ち越した。次の5月場所、負け越して三役には戻れなかったが、11年1月場所、初日にこの場所7日目から69連勝が始まった「昭和の角聖」双葉山をうっちゃり破っている。双葉山は6日目にも玉錦の引き落としに敗れているので「区切り男」にはなれなかったが、上り坂の双葉山に2度も勝っているのだから、地力があつた。

174cm・98kg。幕内戦歴は145勝164敗1分。最高位は東関脇。12年5月場所、東前頭7枚目で5勝8敗と負け越し、引退した。荒磯を襲名して検査役（現在の審判委員）を務めていたが、26年9月で廃業し、51年2月17日、満71歳で他界した。気が荒い一方



巡業先の高知にて

で親孝行として知られ、巡業先から親に久留米餅等の衣類を贈ったり、弟妹たちにもハイカラな帽子や洋服を届けていたという。中でも両親が喜んだのは、戦時中ながら約40日の日本一周旅行に連れて行ってもらったことであった。

新海の晩年を扱った寺山修司の短編小説に「年齢を尋ねたら『18歳だ、なにしろ4年に一度しか誕生日が来ねえから、いつまでも若くしていられる』と笑っていた」という箇所がある。元氣なら今年28歳の誕生日が来ていた。（のぼこ山きのこ）

連載 新屋のアスリートたち ②

国体陸上競技男子400m優勝者 高橋慶治

皆様は終戦直後の金沢国体・陸上競技で優勝し、戦後の秋田を元気づけた新屋のランナーがいたことをご存知でしたか？一緒に70年前にタイムスリップしてみましよう。

第2回国民体育大会は石川県金沢市を主会場に、昭和22年10月30日から11月3日まで開催された。

大会4日目、陸上競技一般男子400mに登場した高橋慶治選手は、準決勝で51秒9の大会新記録をマーク。決勝では2位に3mもの大差をつけ、52秒7で優勝した。

現地で応援していた父・多茂次郎氏は「今日は調子が良かったから優勝できると思っていました。皆様の声援で優勝でき、これで郷土の方々の期待に報いることができました」と喜びを語った。



観戦中の父・多茂次郎氏

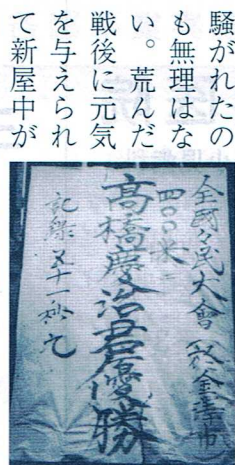
「オレが慶ちゃんを勝たせねば」と町内の三浦捷治、佐々木良吉両氏は、キリタンポや塩魚汁、リングゴ等をどっさり背負込んで金沢入りし、練習場で世話をやくやら、スタンドから声を嗶らして声援するなど、大変な「慶援」ぶりだった。

戦後の混乱期とはいえ、全く無名の選手が日本一になったのだから、騒がれたのも無理はない。荒んだ戦後に元気を与えられて新屋中が湧きかえり、祝賀行列を行って喜び合った。秋田県民に希望と勇気を与えた快挙であった。

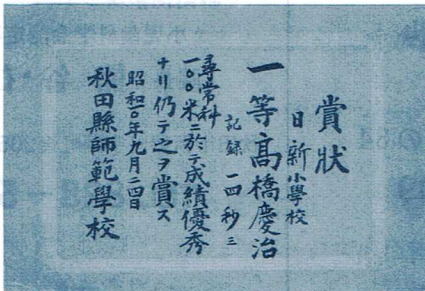
高橋慶治は、下表町で味噌醤油醸造業を営む高橋多茂次郎・千代夫妻の次男として、大正13年2月5日に誕生した。

写真の賞状で分かるように子どもの頃から走るのには速かった。正に「梅檀は双葉より芳し」であった。

日新小学校高等科から進んだ旧制秋田中学でも、早稲田大学商学部時代でも陸上競技部に籍を置いたが、戦時中のため、競技とは无缘だった。



地元で張られた速報ビラ



本格的に練習するようになったのは、終戦直後の代用教員時代に陸上競技の講習会を受けてからである。講師の中央大学の一流選手と互角に走ったのが直接のきっかけになった。

金沢国体の翌年、誘われて中央大学法学部に入學したが、当時の中央大学は箱根駅伝で9連覇するなど黄金時代。高橋は全盛時の中大を副将として支え、関東学生陸上の400mでは23年から3連勝するなど、短距離陣の得点源だった。

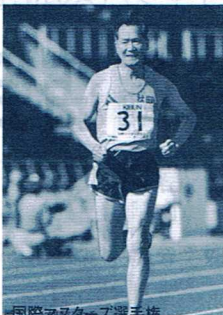
中大OBには秋田県出身で往年の名スプリンター・佐々木吉蔵（36年の秋田国体や39年東京オリンピックのスターターを務めた）氏もいた。

「佐々木先輩には特別目をかけてもらった。先輩を文部省に訪ねた際、いきなりトイレに連れ込まれ、鏡を見ながら腕の振り方を矯正されたこともある」と後に高橋が語っている。

29年の北海道国体30歳以上100mで優勝したのを最後に家業に専念するまで、国体にも毎年出場。毎回のよう上位入賞するなど輝か



大学時代のレースぶり



国際スタジアム選手権40周年記念大会で力走(65歳)

しい競技歴を誇っている。そんな中で、唯一の失敗があった。23年の福岡国体400m準決勝で2連覇を狙ってスタートラインについたものの、タイムミスを合わず、スターターの佐々木吉蔵氏にフライング失格をとられたのである。大先輩で恩人でもある方に宣告されたのは、皮肉としか言いようがない。

平成13年2月12日、新屋の名スプリンターは数々の栄光を残して、77歳で惜しまれながら他界した。学業にも優れた母校である秋田高校の掲げる「文武両道」を地で行った人であった。

奥様の故・武子氏も陸上競技短距離選手として国体に出場している。

「ご子息は、かつて「慶太郎」醤油で日本一に輝き、現在は「白神酵母菌」研究の第一人者。高橋慶太郎氏。東証一部の「日通工」元社長の高橋哲次氏は実弟。毎年、日吉大祭に開催されていた町内対抗少年駅伝は、高橋の国体優勝を顕彰して始まったのだが、途絶えて久しい。寂しいことである。」

(のばい山きのい)



金沢国体優勝盃

連載

新屋のアスリートたち ③

日本プロ野球史上最短試合時間記録の完封勝利投手 渡辺 誠太郎

新屋で最初のプロ野球選手をご存知ですか？秋田県でも2番目でした。しかも、開幕投手を務めたこともあり、登板しない日は一塁手として出場し、一時打率トップに立ったこともあるという投打ともに実力者と言える選手だったのです。

昭和21年7月26日、西宮球場で行われた阪神対パシフィック戦は13時15分に始まり、14時10分には終了した。なんと試合時間は55分。今でも、いやこれからも破られそうもない最短試合時間が記録された。

阪神先発の渡辺誠太郎は5安打88球で完封勝利。相手の湯浅芳彰も7安打93球で完投している。両軍合わせてファウルが6球しかなかったこと、両投手ともコントロールよく制球されていて、打者も早いカウントから打っていた結果、凡打の山を築いたことが理由と言われている。



豪快な投球フォーム

この年、渡辺は開幕投手を務め、シーズン成績は10勝12敗、打者として24試合に出場し、打率は・二八八。

現在の日本ハム・大谷翔平選手のよくな活躍ぶりだった。打者に専念していれば「ダイナマイト打線」の一角を担っていたかもしれない。

渡辺誠太郎は、船場町で納豆製造販売業を営む渡辺助三郎・りえ夫妻の四男として、大正11年2月8日に誕生した。兄弟である長男・喜太郎、次男・得太郎、三男・鉦太郎、五男・博太郎が全員日新小学校野球部という野球一家のため、物心がついた頃には自宅横の通称・渡辺小路で近所の友だちと毎日のように三角ベース野球に熱中していた。



日新小時代

日新小学校では勿論野球部に入ったが、戦時色が濃くなり、野球統制令が布かれ、全県少年野球を始めこれぞといった大会は開催されず、小さな大会を制しては鬱憤を晴らしていた。当時のことを「捕手の長谷川礼治君（後に秋田鉄道管理局・主将／監督）のサインのまま存分に投げ通したものだ」と話している。

捕手の長谷川は「渡辺の投球があまりにもスピードがあつてチップボールが多く、私の顔面によく当たつ

た。監督にマスクの使用を申し出たが認められず、大量の鼻血で退場した後によくやく許可された」と回顧している。

日新歴代の中でもこのバッテリーは1、2を争うほどで、全県大会の無かつたことが悔やまれる。

昭和11年に秋田市立土崎商業学校（現・秋田市立秋田商業高等学校）に入學。数年後、秋田中学との試合で、弟の博太郎と投げ合ったことがあつたが、母・りえはどちらにも応援できず、バックネット裏中央から観戦していたという。

昭和16年に卒業し、阪神タイガースに入団した。その時のことを本人は「小学生時代から憧れていたプロ野球。それも大好きな阪神に入団できたので、初めてタイガースのユニフォームを着た時の感激は夢のようだった」と語っている。



当時のタイガースライン

入団時は、身長182cm、体重72kgと記録されている。この時代としてはかなりの長身であった。

プロ野球公式戦の初登板は入団した年の秋、後楽園球場でのイーグルス戦であった。翌年に初勝利を挙げている。

その後、昭和19年から従軍。昭和21年に阪神に復帰した。この当時の評価は「球速は速くないものの、大きなドロップを武器とした軟投投手である」とされており、日新時代の剛速球投手から大きく変身していたことが解る。

昭和23年に太陽（後の松竹）ロビンス、昭和26年には大洋ホエールズ（現・DeNA）に移籍し、同年末に引退。通算成績は30勝34敗。打率は・二五二。昭和25年の選手名鑑には「背番号17、コントロールを覚えればものになる。打撃は優秀である。趣味は映画」と載っている。



引退後の頃

梅崎作太郎（日新／秋田中／東京製鐵／戦死）や赤根谷飛雄太郎（秋田商／急映・東急／秋田商監督）とともに「戦前秋田の三大投手」と称され、大仙市にある「かみおか嶽雄館」の「野球ミュージアム」に写真や記録が展示されている。



引退後の頃

引退後は神戸市に住んでいたが、平成25年6月22日逝去。91歳の高齢であった。

（のぼり山きのこ）

連載 新屋のアスリートたち (4)

ユーバー杯(女子バドミントン国別対抗戦)で優勝 横山満子 (現姓・樋渡)

昨夏のリオ・オリンピックで、バドミントン女子複が金メダル、単で銅メダルと大活躍したことは記憶に新しいと思いますが、皆さんはバドミントンがオリンピック種目になる以前、新屋に世界一に輝いた選手がいたことを御存知でしたか？

昭和41年5月21日、ニュージーランドの首都ウェリントンに、第4回ユーバー杯決勝を迎えていた。日本は初参加で決勝進出。相手は過去3連覇、10年間無敗のアメリカだった。

横山は第2単に登場、勝利への執念でシャトルを追い、最後はスマッシュをバックラインに決めて勝利した。日本は単の3勝が効いて、5-2で初優勝を飾った。

22日午前0時半、自宅に「日本優勝」の報が入り、家族全員が飛び起きて大喜び。父・金作は「コンディション調整には人一倍神経を遣っていたので恐らく上々の調子に持って行き、実力を出し切ってくれたせいでしょう」と嬉しさで一杯。恩師の脇坂安隆教諭は「ヨ



ユーバー杯と選手団 横山選手

コの優勝は苦境を乗り越えた根性の賜物ですよ」と語っている。

帰国して秋田駅に着くと大勢が迎え、オーブンカーで会社まで優勝パレードを行った。新



母校前で優勝報告

屋では鹿嶋船の見返り人形にした町内もあつた。

横山満子は、新屋駅前に住む横山金作・マキ夫妻の次女として、昭和17年3月30日に誕生した。

日新中学校時代は、音楽部に入るような普通の女の子で、同級生たちによると「運動会はいつもゲツパ近く。そんな人が世界一になるとは！恐らく想像を絶するような努力をしたもんだべ」と口を揃える。

敬愛高校に進み、体育館でバドミントンを見て「簡単で楽しそう」と、全国屈指の強豪校とは知らず「中学には無い競技なのでスタートは同じ」と安易な気持ちで入部した。

ところが全国一を目指す部の練習は半端ではなく、まもなく50人もいた新入部員は自分一人だけになってしまった。しかし、父との「途中でやめない」約束と試合で勝ちたい気

持ちが強く、退部する気はなかった。団体メンバーに入り、動きが悪いとラケットが飛んでくるような熱血指導者・脇坂先生の激しい練習に明け暮れた。

昭和34年、3年生になり、3人の2年生と全国優勝という重圧を背負いながら、辛い練習を続けた。会津総体では団体3位。複では後輩・高橋と準優勝。単に賭けたが、決勝で一進一退の攻防の末、一歩及ばず準優勝。厳しい練習に耐えてきた証を示したかったが、勝負の難しさを痛感させられた。高校時代の苦い試合の一つであった。

高校卒業後は秋田帝国石油株に勤務。先輩の木村や後輩の高橋・長崎らと全国大会で活躍した。特に、国体は山口での優勝を含め35・39年まで5年連続3位以内を記録した。

しかし団体や複では優勝しても、単ではいつもあと一歩及ばず、精神的脆さが出て優勝を逃し続けていた。当時、日本バドミントン協会は女子の海外進出に積極的に取り組む、横山は密かにユーバー杯出場を目指していた。

40年の全日本総合選手権は秋田帝国石油株体育館で開催されたが、この大会はユーバー杯の最終選考大会で、横山が選ばれるためには単で優勝する



この大会で選手宣誓

ことが条件だった。このチャンスを生かすべく猛練習。会社や協会から多くの支援もあり、遂に優勝。晴れてユーバー杯ナショナルチーム入りを果たした。

アジア代表として、香川・岐阜・山形・新潟・秋田の6選手でユーバー杯初挑戦に心躍らせながらニュージーランド大会に臨んだ。

初戦はインドネシアに5-2で快勝。2回戦は長身選手のイギリスに苦戦したが4-3で退け、決勝に駒を進めた。この大会を最後に引退を決意して臨んでいた横山の活躍は素晴らしく、出場4試合は全勝して、初優勝に大きな貢献をし、有終の美を飾った

現役引退後に結婚。現在子供たちは独立し、秋田市で「夫と二人の年金暮らし」と笑うが、県バドミントン協会の常務理事を務め、普及委員として活躍するなどバドミントンへの情熱は失っていない。

敬愛高校の全国制覇は36年に主将になった妹・綾子や大門モモ子(愛宕町)が弘前総体で団体初優勝。その翌年は準優勝だったが、大塚トシ(緑町)や大門サヨ子(関町)の新屋衆が大活躍した。単では39年に佐々木フミが優勝して横山の無念を晴らした。なお、弟の横山通は昭和39年秋田工高が春夏ともに甲子園初出場を果たした時の主将。



いび、ニュージーランドへ

(のぼこやま)

連載 新屋のアスリートたち (5)

秋田工高ラグビー指導者として全国優勝20回 佐藤忠男

高校ラグビー界の雄と言えれば誰もが「秋田工業高校」の名を挙げる。全国高校ラグビー大会での優勝は15回を数え、全国1位。2位・天理の6回を大きく引き離している。

この秋工の指導者として、全国規模の大会で20回の優勝に導き、「サツチュウ先生」と慕われた人が新屋衆であることを御存知でしたか？

佐藤忠男は、愛宕町・上の坂に住む佐藤甚四郎・センコ夫妻の長男として、昭和4年12月14日に誕生した。日新高等学校時代は通称「たごこ」。

「頭は悪くねがったども、きかねくて勉強しねもんだがら、よく担任の中川正男先生がら拳骨で頭をグリグリやらえてだ。成績は徐々に上がっていった」と級友は語っている。

19年3月に日新国民学校高等科を卒業。同4月、秋田工業学校電気科に入学したが、そこに人生の岐路が待っていた。入部の誘いを受けていた相撲部に行く途中「ラグビー部さ入れ」と先輩に呼び止められた。それが佐藤のその後の人生を決めた。しかも、秋工は戦争中も練習を休ま



日新国民学校時代

なかつた全国で唯一の中等学校ラグビー部であったから、先輩たちと練習しているうちに「サツチュウ」と呼ばれるようになったらしい。

22年早稲田大学専門部工科鉦山地質科に入学。同時に東北出身者として初めて早大ラグビー部に入部。フッカーとして活躍した。



早稲田大学時代

早大を卒業し、1年間能代工高に勤務後、26年4月から母校・秋工の教壇に立った。教科は大学で修めた採鉱であった。担任クラスの生徒たちは「おらほさ首の無い先生が来た」と騒いだ。フッカーと言えばスクラム最前列の中央で敵と直接相対する最も厳しいポジションだ。それを日本一の大学で務めてきたのだから、筋肉が盛りあがり、首が胴体にめり込んでいるように見えるほど鍛えられていたのだ。生徒が驚くのは無理もない。そして、ラグビー部の指導者になったのは自然の流れであった。

26年4月からコーチ、29年4月、47年3月は監督就任。この21年間の

全国高校ラグビー大会での戦績は、26・27・30・31・33・35・39・43年度と、2度の連覇を含めて8回の優勝を遂げている。国体でも第6回広島大会を皮切りに第33回長野大会までの間に12回の優勝。「先生について行けば間違いはない」と生徒たちから全幅の信頼を得て「出れば優勝」という秋工全盛時代を築いた。



秋田工業学校時代



S36-1優勝で宙に舞う

佐藤のモットーは「戦々恐々」であった。大舞台を畏れ慎む気持ちを忘れず、怪我のないよう体と心を鍛えるように指導した。

指導理念は「練習は厳しく、試合は温かく」。確かに早大のメニューを高校生用にアレンジした厳しい内容であったが、生徒たちは「練習は苦しかったが、先生の指導を受けると温かいものが体に入ってくるような感じがした」という。

また「花園に出場した生徒たちよりに出場できなかった生徒たちを忘れることができない」と、花園に出られなかった生徒たちへの自責の念、温顔で温かな思いやりに満ち溢れ、正に大人の風格を漂わせていた。

こんな佐藤は、教え子の仲人を頼まれることも多く、14、15組務めたが、43年11月には、前号で紹介した横山満子の媒酌人も務めた。

56年3月まで部長を務め、58年から男鹿工教頭、61年から大曲工校長、63年には母校秋工校長に就任、平成2年3月に退任した。

ラグビーの指導者だけに留まらずラグビーを通じて青少年の精神、身体の健全育成に力を尽くしたことは高い評価を受け、退任後は瑞宝小綬章（教育功労）を始め、多くの賞を授けられた。

6年には自叙伝を出版した。タイトルは秋工ラグビー部のスローガン「精根尽くして颯爽たり、顧みるときの微笑」の一部で、佐藤が秋工ラグビー部コーチに就任した時に壁に貼り出し「後で自分を振り返ったときに微笑むことができるように一瞬一瞬のプレーに力を尽くすこと」を求めたものと伝わっている。



柔和な表情で解説



出版を喜ぶ教え子たちに胸上げられる

秋工校長を退任して間もなくラグビーからは距離を置いた。良子夫人には「若手育成のためだ」と語っている。平成18年10月26日永眠したが、葬儀には全国の教え子たちは勿論、ラグビー関係者や教育関係者等数百人が参列。その幅広い人脈と温かい人柄を感じさせられるものだった。

(のばこやま)

連載 新屋のアスリートたち (6)

歯科学生なのに学生相撲ハワイ遠征メンバーに選ばれた 三浦捷治

少年野球の名門校としてその名も高き「日新」の黎明期は、熱心な指導者たちによって支えられた。全県少年野球初制覇時に指導者として深くかわり、後に歯科医専（現・歯科大学）在学中は、全日本学生相撲ハワイ遠征メンバーに選抜され、ご当地での親善試合でも活躍し、新屋住民には「シヨんツァン」と親しまれた男の軌跡を振り返ってみよう。

三浦捷治は、当時、忠専寺向かいで「謡正宗酒造」を営む三浦菊治・コノ夫妻の五男として明治38年7月13日に産声を挙げた。

日新小の尋常科時代は小作りの体格でおとなしい少年であった。大正9年、旧制秋田中学（以下秋中と記述）に入学して柔道部の選手になった頃から体格がでっかくなり、豪快な性格が出てきて、5年生では主将を務めた。体軀堂々、風を切って歩いてきた。その風格が終生続いたと思われる。



秋中柔道部時代

大正14年3月、秋中を卒業し4月から日新小の代用教員になり、高等

科野球部のコーチに就任した。指導は「学生スポーツは教育の一環である。スポーツは礼に始まり、礼に終わらなければならない」という信念から、厳しいものだった。練習指導に来てくれた先輩たちにも、だらしないう装いであれば「帰れ」と叱責するほどであった。

翌15年、日新は高等科も尋常科も全県少年野球で初優勝を遂げた。昭和初期の日新黄金時代の幕開けである。

三浦は「青少年の健全な育成には野球だ」と言い続け、あらゆる努力や協力を惜しまなかった。野球を通して、新屋衆の中心となり「日新野球」の基礎を築き、町民がひとつになるきっかけをつくった。その功績は大きい。

代用教員は僅か1年で教壇を去ったが、生徒たちには強烈な教えを残した。肝心の授業の方は、学習効果を狙うことなど皆無で、予定の進度を終



全県3連覇で大喜びのコーチ陣

えると「話コ」を聞かせる。児童たちは授業より話コが大好きなので、煽って授業半ば「話コ話コ」とせがみ、しばしば成功していた。



代用教員時代

その頃の柳沢校長は、時折校内を巡って授業ぶりを観察していた。皮のスリッパの音に特徴があつて「校長が来た」とすぐ分かるものだったので、三浦先生は子どもたちに「面白れ話コ聞かせるとも、俺が右手を挙げたら、一斉に「先生！先生！」って大つき声を出すなだど。えが」と密約を結び、時々練習もしていた。以来、校長が近づくと、サツと右手を挙げ、生徒たちは「先生！先生！」と元気な声を張り上げる。校長は「活発な授業をしているなあ」と目を細めたに違いない。三浦らしい一面であり、教え子たちへの愛と熱い思いが感じられる。

昭和2年、信頼し尊敬していた先輩を頼りに、日本歯科医専を受けて合格。入学と同時に相撲部に入った。「押し」の三浦と評され、早稲田の仲村（後の大相撲関脇・笠置山）とは2度対戦して、ともに勝っている。そんな活躍ぶりが評価され、昭和5年、全国の大学から選抜された10名の一員として第一回ハワイ遠征学生相撲団に参加した。

三浦の活躍ぶりは、当時のハワイ

の新聞でも大きく報じられた。「歯科医専に相撲部があるの？」と世間を驚かせた、とんでもない快挙だった。

歯科医専を卒業後、中表町の黒丸家の一部を借りて三浦歯科医院を開業したが「シヨんツァンが帰ってきた」と大繁盛。結婚を機に、昭和8年、下表町の現在地に移転した。

昭和26年に、第一回全県中学校選抜野球新屋大会が開催されたが、三浦は野球後援会会長として、その準備に奔走し、今年で68回目を迎えた。昭和35年4月10日、54歳で永眠したが、それは奇遇にも待ちに待った長男・捷也の日本歯科大学入学式と同時にあった。



晩年の頃

通夜で「時乾坤に巡り来て雄物川原の深緑……」と本人も作詞に加わった日新野球の応援歌が歌われた。新屋少年野球の生みの親であり、指導者であった「新屋の男」に相応しい見送られ方であった。三浦のスポーツに対する考え方は、長男・捷也によって受け継がれている。（のぼこやま）



↑三浦 ハワイ遠征学生相撲団

連載

新屋のアスリートたち (7)

都市対抗野球では橋戸賞、プロ野球では完全試合達成 佐々木 吉郎

新屋が生んだ2人目のプロ野球選手・佐々木吉郎は、日新中では捕手で4番、秋田商高ではエースとして活躍し、社会人野球では最高殊勲選手、プロ野球ではパーフェクトゲームを達成するなど、大いに新屋衆の血を沸かせたスターだった。その活躍ぶりを振り返ってみよう。

佐々木吉郎は、雄物川の袂・新屋船場町で米穀店を営む、佐々木吉次郎・ソノ夫妻の次男として、昭和15年3月8日に誕生した。

腕白で相撲が強く、野球が大好きな、優しい少年に育っていた。



日新中時代

同27年、日新中に入り、野球部入り。2年生でレギュラーになった

が、秋田市予選の決勝で山王に敗れ全県大会出場はならなかった。その年の全県優勝校は山王だった。

3年生では強肩強打の捕手として、4番に座った。前年の悔しさを晴らすと猛練習を重ね、優勝候補筆頭の南中を退けて久々の全県大会に駒を進めた。しかし、1回戦で能代一に5対6で惜敗。その能代一が全県優勝を遂げた。あと一息だった。

秋商に進んでも捕手だったが、当

時の秋商は投手不足であった。2年生の新人戦で一人しかない投手がガンガン打たれ、監督が「吉郎、投げてみれ」。驚いたものの投げたら意外に好投。投手に転向することになった。3年生ではエースとして県予選の決勝に進み、それまで18年間勝てなかつた仇敵秋高を1対0と完封、戦後初優勝した。秋高の投手は日新中時代にバッテリーを組んだ佐々木信夫であった。



秋商時代

昭和33年、秋商を卒業し日本石油に入社した。次第に頭角を現し、同36年にはエースとして第32回都市対抗野球の決勝まで勝ち進んだ。

しかし、連投の疲れから5回に追いつかれ、補強選手にマウンドを譲った。その選手が以降を無得点に抑え、殊勲打まで打って最高殊勲選手に贈られる橋戸賞を獲得した。

佐々木は「橋戸賞を取るまでプロに行かない」と決心し、練習に励んだ。



優勝と橋戸賞を獲得

翌37年の第33回大会では決勝まで

43イニング無失点という未だに破られていない大記録を達成し、優勝とともに念願の橋戸賞を獲得した。

即戦力として大洋ホエールズ(現・DeNA)に入団したのは、同9月13日。当時大洋は阪神と激しい優勝争いの最中。3日後には登板させられた。僅か1ヵ月足らずの間に7試合も登板し期待の大きさが窺われるが、0勝4敗でシーズン終了、プロの厳しい洗礼だった。

翌年からも防御率は2点台なのに勝ち運に恵まれず、40年からはエースナンバー18を背負って41年5月1日の広島戦を迎えた。



1回だけで交代の予定だったが、別所コーチが「ヒットを打たれるまで投げさせて」と監督に進言。大記録への道が開けた瞬間だった。5連敗中のチームを救おうと必死に投げた。内野ゴロ2という結果は、

胸元でホップした球威の凄さを物語っている。他は7三振、18飛球、投球数102球の堂々たる内容でプロ野球界8人目のパーフェクトゲームという快挙を成し遂げたのだった。



完全試合達成!

大記録後も右肩を痛めるなど故障

が重なり、44年に自己の限界を悟り引退した。通算23勝34敗。しかし防御率2.94は一流の成績である。なぜ大成できなかったのか?

コーチからの過酷なトレーニングで肘を痛めたことが最大の原因とされている。確かに登板後は肘が大きいく腫れ上がり、癒える間もなく登板させられた。佐々木は何も語らず球界を去った。そんな男だった。

引退を考え始めた42年2月、銀座7丁目友人たちが集まれる程度のスナックを開店、第2の人生を歩み出していた。

45年、長女誕生を機に昼の商売に切り替え、49年には日本橋本町にトンカツと日本料理店を開業。

60年には有楽町で日本石油や日本舗道の社員食堂を受託経営。その後は日本橋の日本料理「吉」に絞り、今も秋商出身者や日本石油の人たちが訪れ、昔話に花を咲かせ、繁盛している。

平成20年12月21日、敗血症で亡くなったが、郷土愛が人一倍強く、新屋郷土会に尽力し、母校や会社時代の人たちを大切にしていた。日本料理店を開いたのも、好きな魚釣りで「釣った魚を仲間や知人に食べてもらいたかったから」という。



歳を過ぎて

(のぼこやま)

連載

新屋のアスリートたち (8)

全国高校ラグビーで連続優勝、県高校駅伝で区間賞 大塚 廉造

まもなく「ラグビーワールドカップ2019」日本大会が開催されます。新屋はサッチュウ先生(第5話)の影響もあり、ラグーマンが多い。その中からラグビーだけでなく駅伝でも活躍した選手を紹介したい。

大塚廉造は、下表町の太塚四郎・フツエ夫妻の長男として、昭和14年1月30日に誕生した。活発で走り回り、勉強嫌いで遊山が大好きな子であった。昭和26年、日新中に入ると自宅によく来ていた貝田先生(理科教諭)を慕って科学研究部に入り、科学の楽しさにハマって、同29年秋田工高の工業化学科に進んだ。

その頃の秋工ラグビー部は「戦後第2の黄金時代」と言われ、憧れていた大塚はクラスで真っ先にラグビー部に入った。子供の頃から走力には自信があった。

しかし、常に全国制覇を義務づけられているような秋工ラグビー部の練習は厳しかった。特に1年生夏合宿は、終盤になるとバテ過ぎてお粥も喉を通らなくなり、塩を舐め、水を飲み走り続けた。そして体力の限界を乗り越えた時、思いがけない好プレーができることも経験した。この夏合宿



3年生でスクラムハーフに定着。大いに張り切った。この年はチーム結成時から「弱い」と心配されていたが、年間32回の公式戦は無敗だった。

国体では秋工23―5慶応で優勝。正月の全国大会決勝は秋工14―3盛岡工で9回目の優勝を飾った。準々決勝の保善戦は「実質上の決

をクリアして一回り強くなるが、冬の柔軟体操や腹筋等の体力作りは涙が出るほどきつい。そんな厳しい練習を仲間と競い合い、共に耐え、我慢し、励ましあって乗り越えた。信頼関係は厳しいほど強まった。

「試合では自分の体を殺してボールを生かし、率先して犠牲になり、互いに気を奮い立たせ闘志を込めて協力し合う」という秋工伝統の強いチームワークづくりを練習で徹底的に叩き込まれた。

秋工ラグビー部の最終目標は「正月の全国大会での優勝」であるが、1年生の時は決勝で慶応に5―6で惜敗。国体決勝では天王寺を下して優勝。2年生の時は決勝で保善を零封して8回目の全国優勝を遂げ「超高校級」と言われた。



勝戦」と言われ、両校ともに低いスクラムに鋭いタックル、気迫に満ちた前に出てのディフェンスで譲らず、緊迫した試合になった。前半早々に先制トライを許し苦しんだが、後半PG成功で追いつき、3―3で辛うじて抽選勝ちだった。大塚は「一番思い出に残る試合だった」と語っている。昭和31、40年の10年間の優勝は、秋工が5回、保善が4回で正に「秋工・保善時代」であった。

3年生の秋、陸上競技部に頼まれて全国高校駅伝秋田県予選に出場することになった。全国高校ラグビー選手権が目前に迫っていたことからサッチュウ先生から「あまり頑張るなよ」と言われていたが、真面目な性格はそれを許さず、5区3kmを全力で走った。結果は9分38秒で区間最高記録だった。専門外の競技でも区間賞を取るほどのスピードとスタミナを身につけていたのだ。



卒業が近づき、進学か就職か迷っていたが、東京電力から「弊社は勉学を奨励している

多くの新入社員が大学に通っている

と言われ決断した。入社後は日大理工学部2部電気科に入学。秋工先輩の東京オリンピック体操金メダリストの遠藤幸雄が助手として来られ、体育の時間「大塚君準備運動をやってくれ、ラグビーのいいんだよ」と指示。クラスで一躍有名にもなった楽しい思い出もある。



12年ほど前から、オフィス、工場、福祉施設、社員寮等の給食受託運営のテンシヤル(株)社長に就任し、従業員130名の生活を守って現在に至る。「新屋郷土会」にも貢献。現会長を務めている。



弟・洋夫も秋工ラグビー部で東北電力入社。全国電力会社ラグビー大会で対

戦したこともある。弟の分も合わせて6年間も毎日泥だらけのジャージを洗濯してくれた亡き母には今でも感謝している。毎年のように弟妹一家を温泉旅行に招待する優しい長兄でもある。(のばこやま)

連載

新屋のアスリートたち

(9)

全日本バスケット選手権や日本リーグで優勝、主将を務めた

梅津卓

バスケットボール世界最高峰のNBAドラフトで、八村塁が日本人で初めて1巡目で指名され、大きな話題になり、現在大活躍中です。

新屋はバスケットボール(以下バスケットと記す)選手不毛の地と思っていたら、全国レベルで活躍した選手がいたのです。ご存知でしたか?

梅津卓は、比内町に住む梅津茂男、フジ夫妻の第2子(長男)として、昭和30年9月21日に産声を上げた。

その後、父が勤務していた東北パルプの社宅に移り、共同浴場に集まる子どもたちとワイワイガヤガヤと、楽しく騒いでいたという。

バスケットは日新小学校5年生の頃、東北パルプ体育館で競技していた大人たちを観て興味を持った。

バスケットを始めたのは秋田西中学校1年生の秋からであった。当時の西中バスケット部は、3年間で公式戦は一度も勝てない弱小チームだった。

そんな中で、相撲場の横にあった屋外コートで夕方暗くなるまで埃まみれになりながらボールを追った楽しい思い出もある。その頃の身長は後ろから3、4番目で、目立つほどの長身ではなかった。



西中時代

由利工業高校でもバスケット部に入り、坊主頭になったり、初めての合宿経験をしたり、厳しい先輩後輩の縦の関係を学んだ。身長は188cmにもなっていた。その頃、沖田町に転居した。

梅津の素質は秋田いすゞバスケット部に留まり、勧誘されるまま、同社に入社。勿論バスケット部に入った。

当時のいすゞバスケット部は高校出の選手ばかりで、基本も満足にできていない低レベルのチームであった。

翌年、成田勝コーチが就任し、バスケット部の走力とディフェンスに力を置いた練習となった。連日の積み重ねで、苦しくて嫌な練習だった。

身長は20歳まで伸び続けて191cmになり、チーム3番目の長身であったが、細身なのでリバウンドでぶつかるとはね飛ばされるほどだった。それを克服するべく、練習後も30分、1時間の体づくりのための特別訓練を2年間も課せられていた。

なぜこんなに苦しくて辛い練習をしなければならぬのか?と毎日思っていたし、何度もやめようと思った。それでも続けられたのは同期でシュートが上手く、早くから試合に出ていたライバルがいたからだ。念から、シュートが下手な分、リバ

ウンドでは絶対負けたくないという気持ちで練習に励んだ。チームも少しずつレベルアップし、自分も試合に出てチームに貢献できるようになるにつれて、練習も苦にならず、逆にやらなければ迷惑をかけてしまうという考え方に変わっていった。

昭和57年、小浜元孝氏がヘッドコーチに就任。元NBAアトランタ・ホークスのジャック・ギブンスを獲得。



ギブンスと

快進撃を続ける。日本リーグ2部に昇格し、翌58年11月、日本リーグ2部で優勝した。

昭和59年元日、チームは新屋の日吉神社にお参りしてから、全日本総合バスケットボール選手権に出場するため、東京に向かった。

一戦一戦勝ち抜いて、決勝では65-48で日本鉱業を下した。

2部リーグのチームが優勝したのは後にも先にもこれだけという快挙であった。

4月には日本リーグ1部に昇格した。しかし、北国には大学出の優秀な選手の補強ができない、シーズンが冬なので寒い秋田では体調管理が難しい、等から61年9月には本拠地を東京に移し、チーム名も



2部リーグ唯一のオールジャパン優勝



主将で日本リーグ制覇

「いすゞ自動車」になった。補強もうまくいき、アメリカ遠征をさせてもらえるなど練習環境も良くなり、昭和63年度には、主将として日本リーグ優勝を遂げた。

平成元年3月、年齢による体力の衰えから現役を引退。小浜監督からコーチの要請があり、自信はなかったが最年長で選手のことを一番知っている自分に気づき引き受けた。これが彼の

人生のターニングポイントになった。コーチ業は、いすゞの他に法政大学と4年間、日本代表チームと3年間兼務した。

平成13年にチームを離れ社業に専念していたが、青森いすゞから「青森山田高校が監督を探している」との話があり、小浜監督の快諾を得て、14年8月から同校のコーチに就任した。24年1月まで在籍したが、一度も全国大会に出場したことがなかったチームを県大会で優勝に導き、全国大会でも初戦を突破させた。

小浜監督に「今後も指導者者としていきたい」と話していたが、「新潟医療福祉大学」を紹介され、25年4月から男子バスケット部・監督に就任し、現在に至っている。

今後どんな名選手を育ててくれるのか、新屋衆として楽しみな存在である。(のぼこやま)

連載
新屋のアスリートたち
 (10)

全県少年野球で高等科も尋常科も初制覇した日新チーム

かつて新屋は『少年野球』と聞けば、仕事そっちのけで町を挙げて応援に駆け付けた「野球の町」として有名であった。その礎になった一因を紹介したい。

第1回全県少年野球が開催されたのは大正10年。最初は小学校・高等科の大会であったが、尋常科の大会は第4回大会から始まった。高等科の大会が現在の少年野球に受け継がれている。

日新小学校は同12年の第3回大会から参加。大門昌太郎(愛宕町)と大塚豊三郎(緑町)のバッテリーで勝ち進み、3回戦は優勝候補・神宮寺に5対4で勝利。準決勝で優勝した能代に3対4で惜敗したが日新ナインは大いに自信を持った。

翌大正13年には、海に近い清水出脇の地に、応援歌に登場する「西山原頭(グラウンド)」ができ、練習に一段と熱が入った。

大正15年は「新屋厄年祓年祝祭」が始まった年であるが、夏は少年野球で沸きに沸いた年でもある。

A組(高等科)が、広面、土崎、本莊を撃破して初の決勝に進み、相手は強豪・中通。日新は2回に押し出して1点先取。この点差を守り切り

7対6で初優勝を飾った。



4番打者の大島勘九郎(関町)が3割4分の高打率で3番の斉藤庄次郎とともに打撃賞に輝いた。6番に渡辺勇之助(下表町・渡勇)の名も見える。

メンバー

A組	三浦	捷木	治一郎
二遊	佐々木	塚庄	次郎
投	大斉	大島	勘九郎
捕	辻大	渡辺	金太郎
左中	渡大	塚崎	豊善
右中	森川	又司	

B組(尋常科)

も旭北や大館を破って初の決勝進出。常勝だった神宮寺を3対0で完封勝利。大会史上初のアベック優勝を遂げた。後に甲子園に4年連続出場し、「戦前秋田の三大投手」と言われる梅崎(関町)が5年生ながら5番に名を連ねている。



この強さの秘密の一つは三浦捷治や平川民治という稀代のコーチの存

メンバー

B組	三遊	捕	投	左	一	二	右	中
平	森	三	大	梅	佐	菅	森	川
川	民	弥	博	富	太	正	清	松
正	太	治	昇	一	郎	治	昇	一
太	正	清	松	川	正	太	治	昇

これまでの神宮寺と中通の時代を終わらせ、新たに「日新黄金時代」の幕開けを告げる快挙であった。

因みに、尋常科はこの年から4年連続優勝し、3年連続した年に永久優勝旗を授与された。コーチ陣が大喜びで撮った写真が残っている。



この優勝旗は、昭和31年の日新中学校の火事で焼失してしまった。少年野球史上唯一の貴重な永久優勝旗である。尋常科の優勝旗をなぜ中学校に保管していたのか、残念でならない。

一方、同4年間の高等科は優勝、準優勝、準優勝、優勝と続き、全県少年野球の決勝はA組もB組も4年連続日新が出ていたのだから「日新の野球/野球の新屋」として否が応でも全県に鳴り響いたのであった。

「刃向こう者は蹂躪せん：常勝の軍日新の：新屋魂伊達じゃない：」という応援歌が生まれたのも頷ける。

この強さの秘密の一つは三浦捷治や平川民治という稀代のコーチの存

在が大きかった。二人によって作られたという応援歌「時乾坤にめぐりきて雄物川原の深緑：」は正に新屋の野球の象徴であった。

もう一つは、西山グラウンドでの猛練習にあった。一例を挙げれば、個人ノックで一人の選手に二人がかかりでノックするという激しいものだった。さらに全練習終了後「ノーエラー」タイムと称して、全員がノックを受け、一人でもエラーすると全員やり直しとなり、全員ノーエラーになるまで、何回でも、暗くなってでもやり続けたという。

だから守備は当時の野球評論家から「鉄桶」と称えられた。

汗と涙で疲れ切った選手たちが、暗くなったアカシヤの小道を最後の力を振り絞って声高らかに「：森のアカシヤ暮るる頃：」と歌って帰る姿に町民は元気をもらっていた。



とところで、前述の永久優勝旗の写真は文字が全て裏文字になっている。焼き付ける時に後前にしたのではないかという説もあるので、裏返しにしたものも掲載してみました。

写真の諸氏は全員鬼籍入りしており、正解を聞くことはできません。皆さんはどちらが本当ただと思いますか？ (のぼこやま)

B組(尋常科)決勝

神宮寺	0	0	0	0	0	0	0	0
日新	0	2	0	1	0	0	X	3

A組(高等科)決勝

日新	0	1	3	2	0	0	1	7
中通	0	0	4	1	0	0	1	6

連載

新屋のアスリートたち

(11)

全国高校サッカー選手権で優勝、社会人では全日本代表としてワールドカップ予選やアジア競技大会に出場した 平澤周策

平澤周策は、緑町の父・作五郎、母・チヨの5男として昭和24年3月5日に誕生した。兄4人姉2人の末子であった。



日新小6年生

日新小の頃は、漠然と「プロ野球選手になれればいいな」と考えていたような目立たない生徒であった。

ただ、秋商サッカー部で活躍した兄・雄策と敬作の影響もあり、サッカーは好きで、家には使い古したサッカーボールがあったので低学年の頃からボール遊びはしていた。

昭和36年、日新中に入学した時、濱野先生が赴任し、サッカー部が新設され、迷わず入部した。これが将来の進路が決まった瞬間で幸運と言えよう。サッカー部ができなければ、野球部に入っていたという。

同期入部で、後に高校まで一緒にプレーした高橋定雄(上表町)は「その頃からボールコントロールは抜群。ドリブルは走る速さと同じで我々とはレベルが違っていた」と語る。

同39年、秋田商高入學と同時にサッカー部に入り、内山先生と石黒監督の下、厳しい指導を受けた。この3年間のサッカー部生活が平澤の人間形成の礎となった。

1年生で出場機会を与えられた時は感激した。この年は全国高校サッカー選手権でベスト8進出。2年時は岐阜国体でベスト8に留まる。

3年生になって全国高校総体では1回戦で水戸高に抽選負けの屈辱を味わったが、大分国体では2回戦で強豪・習志野を相手によく走り、当たり、3対0で快勝。準々決勝は1対0で甲府工を振り切り、久々に全国大会ベスト4に進出した。

準決勝は難敵の浦和南に0対2で敗北。めげずに臨んだ3位決定戦は地元・大分工に延長の末引分けとなり両チーム3位。この大会でチームも平澤自身も全国大会でも十分戦えることを実感した。

3年間の総仕上げは全国高校選手権であった。雪の秋田から早く土に慣れるため愛知県刈谷市で合宿し、上々のコンディションで西宮球技場に乗り込んだ。

初戦の徳島商を延長の末2対1で下し、準々決勝は岐阜国体で負けていた明星に1対0で雪辱。準決勝は名門・浦和市立を1対0で退けた。

昭和32年度に秋商が初優勝して白河関以北に初めて優勝旗を持ち帰った時の選手に兄・敬作がおり、準決

勝の相手も同じ浦和市立であったので、筆者は「縁起がいい、優勝するかもしれない」と思っていた。

ところが、相手の藤枝東は松永という好選手を擁し、全国高校総体と国体を制し、高校三冠は確実と言われた強敵中の強敵だった。

前半33分平澤が強引に左から持ち込みセンターリングしたが内山のシュートが外れ絶好の得点機を逃す。あとは防戦一方で、延長も再延長も両チームともに0が続き、両チーム優勝となった。シュート数は藤枝東の29本に対し、秋商は5本。よく凌いでくれたものだ。



優勝して表彰式に臨む

「平澤を活かせなかった」と報じた新聞もあったが、平澤は優勝した喜びよりも「負けないで良かった」としか思っていなかった。

優勝旗は、最初の半年間は秋商が保持することになり、秋田駅前に凱旋。パレード等盛大に祝福された。

活躍が認められ、主将の外山とともに日本ユースサッカー代表に選ばれ、タイに遠征した。

就職は某百貨店内に内定していたが、全国大会での活躍やユース代表が評価され、日立製作所から兄・敬作を通して勧誘された。内定済の百貨店との調整もやってくれて、晴れて日立サッカー部の一員となった。

日立製作所は、昭和40年創立の日本サッカーリーグ(JSL/Jリーグの前身)で活躍しており、平澤は背番号11でデビュー。兄の敬作と一緒にプレーする夢が叶った。「走る日立」の異名で呼ばれたチームの中心選手として、47年にはJSL1部で初優勝。同年と50年は天皇杯も獲得。同51年は第1回JSLカップ戦を制した。



天皇杯を獲得して笑顔

同45、49年は全日本代表として国際試合に35試合出場。クアラルンプール、バンコク、テヘラン、ソウル等、海外遠征も数多く体験した。

昭和53年の引退まで、JSLでは160試合に出場し、20得点を挙げている。国際試合では35試合に出場し4得点を記録。本来はFWであったがMFもこなす器用な選手でもあった。



西独FCと国際試合

現在は、船橋の自宅で奥さんとお嬢さんの3人暮らし。子どもたちのサッカースクールのコーチを務めたり、地元の高齢者たちとシニアチームを結成して楽しんでいる。

(のばこやま)